

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	山本固一郎君の變死をいたみて : 文苑
Author(s)	多淚生
Citation	龍南會雜誌, 16 : 38 - 39
Issue date	1893-04-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4068">http://hdl.handle.net/2298/4068</a>
Right	

紅葉織りなす秋の山

帝の事のみ思ひ出で

さらば御身はいかにして

浮世の外れ尼の身と

聞まほしさと云ひつれば

其身の事の本末を

歸る夕の雁金を

涙に袖のかわくまもあし

行先き長き誓りを

なまたまひしか事からを

こなたの尼は今迄も

主の尼に語りけり

### 山本固一郎君の變死をいたみて

#### ろの一

昨日まで

何地<sup>いづち</sup>行けん今朝よりは

うしこの室に君寢ぬと

行けば何事ぞ人々は

あとげなく

日はとや高くのぼりぬと

口動かさずさかぬなり

「如何に死せしか此君は」

かしこの木影こゝの園

隈なくさがし求むをど

悲しく人のいふまゝに

君の周り又打集ひ

眠れる顔に顔よせて

呼へとさけべどつむりたる

唯一言のいらへだに」

問へど傍<sup>かたへ</sup>の人々は

聞きてはいと古への

斷ち切りつゝも世をすてゝ

くるまからずば告玉へ

おゝひし袖を放ちやり

(未完)

多 涙 生

遊<sup>たは</sup>ひ戯れしりの君は

片影だにも見へぬと」

いざ立よりて覺<sup>さ</sup>さんと

涙にくれて物悲し」

「いざさめたまへ起玉へ

眼開かず結びたる

さてはこの君死にけるか

涙にくれて物言はず

心はいたく亂をしか  
君が事のみ思はれて  
紙にうつせし君が影  
ながひる毎に見る毎に  
涼しき君が目の中に  
君は知るらん今はこや  
餘りに別れの悲しさに  
急きつ行けばなよ竹の  
あたらし盛れ櫻花  
散るをれしまぬ人やある  
かゝらん後に百千度  
我は愚になりにけりな

その三

實にや此君世にありて  
思ひは澄める秋の月  
早く此世をすてにけむ  
浮世の塵に染まずして  
佛に近く遊ぶらん

讀むべき書は手にとれど  
書も讀まれず字もかけず  
此世に残るかたみとて  
戀しさのみぞいどいます  
映せしをれが面影ぞ  
やつれ果たり我姿  
迷ひにけりなわがこゝろ  
風のまに／＼動くなり  
一夜の嵐に散にけり  
涙の雨の晴るゝ間をなき  
流す涙も悲しみも  
ものいふ度になみだぐむ

心は清き蓮の花  
曇りしふしもなかりしに  
十七年の生涯に  
犯せし罪のあらざれば  
佛に近く遊ぶなるらん

書くべき筆は手にとれど

朝な夕なに手に取りて

冥路の旅の今日までも

かしこも君が影見ゆと

花愛づる人は澤にあれど

君を還さん術なきに

濁りに染みし事もなく  
過世の縁いかなれば  
なせしいさをは少くも  
其玉の緒は極樂の